

今年が生誕、150年

# 高橋龍太郎

日本のビール王と呼ばれた男

*Takahashi Ryutaro*

*His life & achievements*

## 高橋龍太郎 プロフィール (1875 - 1967)

たかはし・りゅうたろう / 1875年(明治8年)に内子町で生まれる。旧制松山中学校を卒業。東京高等商業学校、京都第三高等学校を経て、大阪麦酒(株)に入社した。1937年には大日本麦酒(株)の社長に就任。世界三大ビール会社の一つにまで発展させた。1951年には吉田茂内閣の通商産業大臣を務める。日本サッカー協会会長、プロ野球チーム「高橋ユニオンズ」を設立するなど、スポーツの振興にも尽力。1967年(昭和42)92歳で死去。

内子町出身の高橋龍太郎は、日本のビール業の発展に尽くし、「日本のビール王」と呼ばれた人です。その活躍はビール業界にとどまらず、政治や経済、スポーツの分野にも貢献。人のために力を尽くし続け、たくさんの方の偉業を残しました。

まちの偉人ですが、「どんな人かよく知らない」という人もいるのではないのでしょうか。今回の特集では、生誕150年の節目に龍太郎の生涯に迫ります。まちの偉人について知り、学ぶことがあなたの生き方のヒントにつながるかもしれません。

# 高橋龍太郎の足跡を訪ねて



国の登録有形文化財に登録されている高橋邸



1\_ 離れの入り口に掲げられる「止談風月無用者可入」の札 2\_ 父の高橋吉衛  
3\_ 欧米視察で龍太郎が持ち帰ったドイツやイギリスの陶製のビールジョッキ



4\_ 洋間には龍太郎に関するさまざまな資料を展示 5\_ 琴の演奏会を開催。貸館もできる



6\_ 離れから見える庭の景色 7\_ 縁側のある明るい座敷

Interview



風雅  
代表 西岡 真理子さん

高橋家の気風を大切に  
誰もが気軽に訪れる場所

私たち風雅は「文化交流ヴィラ高橋邸」を運営する地域の女性グループで、約30年にわたり活動を続けています。

龍太郎さんは松山中学校に入学するまで、この生家で暮らしていました。邸内には本人の書やコレクションしたビールジョッキなど、ゆかりある品を展示しており、龍太郎さんを身近に感じられます。離れの2階から見える庭や山並みの四季折々の風景もおすすめ。高橋家の人たちが愛したふるさとの景色を見られます。

高橋邸を運営するうえで大切にしているのは「止談風月」の気風。琴や茶道の文化活動やイベントの場として幅広く活用され、離れは宿泊もできます。高橋邸は誰もが気軽に訪れることのできる場所。町内の皆さんにももっと親しんでほしいので、ぜひゆっくりと過ごしに来てください。

## 文化交流ヴィラ高橋邸

- 住所 内子町内子2403
- 電話番号 0893(44)2354
- 開館時間 午前9時～午後4時30分 (火曜日は定休日)
- 駐車場 あり/10台(無料)
- 入館料 無料(宿泊は有料)

uchiko\_takahashitei

詳しくは高橋邸の公式Instagramをご覧ください。



小さな田舎町から広い世界に目を向けていた龍太郎——。その人格はどんな環境で育まれたのでしょうか。現在はまちの文化交流施設となっている生家を訪ねました。

### 高橋家のおおらかな気風と文化を愛する心——

内子の市街地から少し離れた場所にある「高橋邸」。石垣や土塀、門構えの風格あるたたずまいで来訪者を迎えてくれます。門をくぐると「止談風月無用者可入」と書かれた札が目に入ります。「風流をたしなむ人なら、用事がない人でも気軽に屋敷にいらっしゃい」という意味で、高橋邸を運営する「風雅」のメンバー・西岡真理子さんは、「文化を愛し育てようとする家人の心が伝わるすてきな言葉」とにこやかに教えてくれました。昔は旅人や力士、文化人などさまざまな人が訪れ、自由に交流をしていたそうです。龍太郎が生まれた高橋家は、おおらかな気風を持っていました。

### かな気風を持っていました。内子聖人といわれた父・吉衛のもとで育つ

龍太郎は明治8年(1875)に内子で生まれました。高橋家は庄屋の分家で、江戸時代には酒造業を営むとともに、広大な田畑を所有。大洲藩の財政を支えるほど豊かな家柄でした。龍太郎の父、吉衛は名家の当主であり、教養の高い人格者でした。漢学や数学を学び、保育小学校の教師を務めるなど、子ども達への教育に力を注ぎました。地域の人たちからは「内子聖人」と慕われ、吉衛のもとには多くの人が訪ねてきたといいます。そんな父のもとで、幼少期から知識だけでなく、人としての在り方を大切にすることを

受けてきた龍太郎。後に「父の姿から大いなる影響を受けた」と語るほど、人生を支える大きな柱となりました。

### ビール業までの歩み

龍太郎は小学校を卒業後、旧制松山中学校(現・松山東高等学校)に入学し地元を離れます。卒業後は実業家を目指して東京高等商業学校(現・橋大学)に進学。しかし、重い脚気にかかり、長期休養が必要に——。京都第三高等学校(現・京都大学)に転校します。その後は伯父の勧めで、アサヒビール(株)の前身である大阪麦酒(株)に入社。ここから龍太郎のビール人生が始まるのでした。

るのでした。

### 龍太郎の生家をまちの活用のために寄贈

日本を代表する偉人となった後も、ふるさと内子に思い入れがあった龍太郎はたびたび帰郷。その時には生家で過ごし、まちの人たちとの旧交を温めたそうです。龍太郎の亡き後は長男の吉隆氏(元アサヒビール社長)が引き継いでいきましたが、まちのために活用してほしいと、遺族によって平成5年(1993)に町へ寄贈。現在は「文化交流ヴィラ高橋邸」として、地域に開かれた場所として多くの人に親しまれています。



## 親しみが湧くエピソード

### episode 1

#### 地元子ども達へ投資

龍太郎は内子中学校へグランドピアノを寄贈したり、内子小学校へ寄付をしたりと、未来を担う子ども達への投資も惜しみませんでした。寄贈されたピアノは今も大事に使われていて、合唱コンクールの練習などで生徒たちが弾いています。



使い込まれていて、深い  
あるいい音がするそう

### episode 2

#### 町民の心に残る龍太郎の記憶

70～80代の人には、龍太郎が大臣に就任して帰郷したときのことを今でも覚えている人もいます。取材では「龍太郎さんへ贈ったお祝いの歌を今も歌える」「龍太郎さんに頭をなでてもらった」「子どもながらに内子から大臣が出たことを誇りに思った」など、当時の思い出をうれしそうに話してくれました。

### episode 3

学生時代の  
あだ名はオンリーナイン

松山中学1年の頃、久万高原町に一泊旅行をしたときのこと。宿で夕食のご飯のお代わりを何度もしていた龍太郎は、「何杯目か」と聞かれたところ「たった9杯」と答えたそうです。以来、「オンリーナイン」のニックネームがついたといいます。米の食べ過ぎで脚気になったというエピソードも残っています。

## ビールだけじゃない

### 私財を投げ打ち プロ野球チームを設立

当時のパ・リーグ総裁に、球団設立を持ち掛けられた。大の野球好きでもあり、「日本の球界発展のためなら」と一大決心。私財を投じ、79歳で「高橋ユニオンズ」を設立した。しかし集まったのは全盛期を過ぎた選手ばかり。「史上最弱」といわれ3年で解団した。龍太郎はどんなに負け続けても毎試合、球場を訪れ選手を励ました。看板選手だった佐々木信也さんは「こんなオーナーのもとで野球ができて幸せ」と話したという。

#### 高橋ユニオンズ

大日本麦酒の主力商品だった「ユニオンビール」が、球団名の由来。「団結」の意味も込められている



### 多芸・多才で 書や将棋がプロ並み

たゆまぬ努力により、龍太郎は書や将棋でも優れた才能を発揮した。書は近代日本の書家・山本竟山に師事。若い頃には「肱水」、晩年には「在田」の号で多くの書を残した。母校・松山東高等学校の創立80周年には「至道無難只嫌揀擇(道に到達するのは難しくはない、ただより好みを避けよ)」という扁額を贈っている。将棋は名人・阪田三吉の門下生として指導を受け、3段の腕前。その「芸」は、人間関係を育むうえでも大いに役立ったそう。



高橋邸に飾られる「代弁は不言なり」の扁額

### 第三次吉田茂内閣の 通商産業大臣を務めた

昭和26年、第三次吉田茂内閣の通商産業大臣に就任。総理から要請された時は重責に悩んだが、引き受けることに―。76歳での挑戦だった。地元にとっては大きな喜びで、同年に龍太郎が帰郷したときには、地域の子もたちがお祝いに旗を振り、歌を歌って出迎えたという。そのほか日本商工会議所会頭や日独協会会長など、さまざまな要職を務めた。与えられた役目に全力を尽くし、戦後の日本経済の復興に貢献した。



大臣に就任後、帰郷したときに高橋邸の前で

### 72歳でサッカー協会の会長に 日本サッカー殿堂入り

昭和22年から7年間、戦後の大変な時代に日本サッカー協会の会長に就任。サッカーは戦争で命を落とした5男・彦也が、熱心に打ち込んでいた。息子を立派な人間に育ててくれたサッカーへの恩返しをの気持ちを込めて、会長を引き受けた。就任した年には天覧試合を開催。試合後には昭和天皇とまだ10代の現・上皇陛下をグラウンドへ案内した。サッカーの発展に尽力し続け「日本サッカー殿堂」にも選ばれている。



選手をねぎらう昭和天皇(中央右から2番目)

## ビールに関する偉業

### ビールに情熱を注ぎ 会社の工場長に抜擢

留学を経た龍太郎は「外国のビールに劣らない、うまいビールを造りたい」という思いが増す。帰国後は吹田工場で技師として働き始め、ドイツで培った技術を発揮し、ビール造りに邁進する。明治39年には大阪麦酒と「エビス」の日本麦酒、「サッポロ」の札幌麦酒の3社が合併し、「大日本麦酒株式会社」が誕生。龍太郎はその工場長を任せられ、国内最大のビール工場をまとめ上げ、日本のビール業を先導していった。



大阪麦酒吹田村醸造所(後の吹田工場)

### 多くの人に慕われ過ぎて 銅像がたくさんある

龍太郎は技術者時代から人を大切にしており、経営者を引退後も会社の相談役として後進の支援に努めた。後輩たちは龍太郎の偉業をたたえ、吹田工場内に銅像を建立。龍太郎にも座像を贈っていて、「社員の信望極めて厚し」などの言葉が刻まれている。地元では90歳を記念して、有志が内子中学校にレリーフ入りの記念碑を建立。龍太郎は除幕式への参加はかなわなかったが、お礼の言葉を録音したテープを送ったという。



▲レリーフ入りの記念碑



座像 ▶  
どちらも現在は高橋邸に設置

### 入社半年でビールの本場へ 6年間ドイツで猛勉強

大阪麦酒に入社してすぐにドイツに留学した龍太郎。当時、会社にはビールを醸造できる日本人がおらず、ドイツ人技師に頼っていた。会社は「日本人の手で、日本人の口に合うビールを造りたい」と、大学で機械工学を学んだ龍太郎なら、醸造方法と機械操作の両方を習得できると期待し送り出した。ドイツ語も話せないまま出発し、現地では実習や研究を行い、約6年間、懸命に学び会社の期待に応えた。



#### 私生活では―

ドイツから帰国した翌年の明治38年、31歳のときに大阪麦酒の支配人・生田秀の娘、ミツと結婚。5男3女に恵まれた

### 大日本麦酒の社長へ 日本のビール王と呼ばれる

昭和10年、会社はドイツビールの権威・リュウエルス博士を日本に招いた。博士は「日本人の手で完成されている」とその味を高く評価。龍太郎の「日本人の手で外国のビールに負けないうまいビールを造る」という夢がかなった瞬間だった。その後、龍太郎は62歳で社長に就任。ホップの完全国産化を成功させるなど、さまざまな功績を残した。大日本麦酒は世界三大麦酒会社の一つとなり、龍太郎は「日本のビール王」と呼ばれた。



中央がリュウエルス博士、右が龍太郎

# 「すげーさ」と「素顔」 龍太郎さんの

知ればあなたもファンになる

ここで紹介する偉業やエピソードは、町誌や文献、龍太郎に関わりある地域の人たちの話をもとに掲載しています。あまりの功績の数に驚くとともに、挑戦し続けた人生だったことが分かります。偉大さだけでなく、龍太郎の優しさや懐の深さも伝わってきます。



Information 展示のお知らせ

誕生150周年特別企画展 日本のビール王・高橋龍太郎

日本のビール業界の発展に貢献し、戦後の経済復興にも尽力した高橋龍太郎。その生涯と功績を紹介します。

●会期 11月1日(土)～12月21日(日)

●会場 商いと暮らし博物館

《関連講演会》

●日時 11月16日(日)午前10時～正午

●演題 「近代ビール醸造とアサヒビールの誕生」

●講師 藤井裕之さん(吹田市立博物館元学芸員)

【申込・問い合わせ】

町並・地域振興課 歴史まちづくり係

☎0893(44)2118



# 龍太郎さんの歩んだ 生き方に学ぶ——

龍太郎の生き方に影響を受けた、まちの人たちに話を聞きました。龍太郎の活躍や生き方は私たちに勇気や励みを与えてくれます。生誕150周年を迎えるこの機会に、あなたも龍太郎の生き方に触れてみませんか。



晩年の龍太郎

Interview



道の駅内子フレッシュパークからり  
山口 佳一さん

## 夢はみんなが笑顔になれる「内子産」のビール造り

まちの特産品を生かした商品開発に取り組んでいます。2年前には内子産のじゃばらを使ったビールを造りました。きっかけは、龍太郎さんが国産のビール造りにこだわったように、「内子ならではのビールができたら面白い」と考えたことです。

将来は内子産の原料で内子で醸造するビールを造りたいという、大きな夢があります。みんなが関わり、みんなで作るビールができれば、きっと農業やまちの活力にもなるはず。昨年からホップの試験栽培を始めました。内子の土壌で育つか心配でし

たが苗は順調に成長し、多くの実を収穫できました。酒の業界に関わる人や農家さんも仲間に加わり、楽しみながら作業を進めています。このホップは夢の種。道のりは長いけれど、簡単にはかなわないからこそ挑戦しがいがあります。夢に近づけるよう、仲間と一歩ずつ頑張りたいです。



1\_試験栽培で収穫したホップの実 2\_内子産じゃばらを使ったビール。爽やかな味わい

Interview



酒井 佳子さん(内子中2年)

## 私も何でもチャレンジして、自分の道を見つけたい

まちの歴史を探求する授業で龍太郎さんについて調べました。地元の偉人なのに「日本のビール王と呼ばれるすごい人」くらいしか知らなかったので、詳しく知りたいと思いました。龍太郎さんのすごさはビール業だけでなく、政治やスポーツなど全く違う分野にも挑戦し、結果を残したところ。あの時代にドイツに留学し、異国の地で学び続けた姿勢も見習いたいです。

私は英語が得意で海外に興味があります。来年は青少年海外派遣事業に挑戦し、ドイツ・ローテンブルク市に行ってみたいです。ちゃんとコ

ミュニケーションがとれるか、一人でホームステイできるか、不安もたくさんあるけれど、広い世界を自分の目で見てみたい。私も龍太郎さんのように何事にも挑戦し、ちょっとくらいつまづいても諦めずに、とことん頑張りたいです。いろいろな経験を積んで自分の道を見つけたいです。



部活動のバレーも全力で取り組む酒井さん

## 龍太郎さんの思いは今の私たちにつながっている

風雅の元メンバーで、龍太郎さんについて20年以上調べ続けています。龍太郎さんは寡黙な人で自分のことを語ることは少なく、自伝も残っていません。でも龍太郎さんの功績や縁ある人の話から、とっても努力家で人の気持ちを大事にする人だったと想像できます。

高橋邸にはビール会社をはじめ、野球に関心のある人など、龍太郎さんに心を寄せる人が今も訪ねてきます。亡くなった後も人を呼び寄せ、まちと人を結ぶ力を持っている、これこそが偉人の力だと思います。龍太郎

さんの生き方に触れることはまちの文化や豊かな人間性も育んでくれます。私たちがおいしくビールを味わえるのも、龍太郎さんが情熱を注ぎ込んできたからこそ。その足跡は今を生きる私たちへとつながっています。まちの偉人の魅力を、もっと多くの人に知ってもらえたらうれしいです。



Interview



元・風雅メンバー  
大野 千代美さん

大野さんが龍太郎について執筆し、掲載される本、『文化愛媛82号』と『郷土うちこ32号』

## お手本にしたい、龍太郎さんの生き方

横田酒店は100年以上続く酒屋で、アサヒビールの特約店でもありました。高橋家とは近所だったこともあり、祖父と龍太郎さんは交流がありました。私の名前「光敏」は、祖父が龍太郎さんをお願いして名付けてもらったもの。私にとって一生の宝物です。

祖父からは「龍太郎さんの人生は順風満帆ではなかった」と聞いています。大学や就職で第一希望がかなわなかったなど、思うようにいかないことも多かったそうです。その話を聞いて、幼いときから酒屋を継ぐ将来が決まっていた、自分の人生に重ね合

わせることもありました。挫折や困難にぶつかっても常に前を向き続けてきた龍太郎さん。その生き方に自分も励まされました。ふるさとを大事にし、人のために尽くした生き方もすでに、お手本にしたいです。これからも地域とともに歩む酒屋であるよう、心を尽くしていきたいです。



横田酒店のギャラリーで開かれた龍太郎を学ぶイベント。当時のジョッキやラベルなども展示

Interview



横田酒店  
横田 光敏さん